堺環濠都市遺跡出土遺物からみた「高麗茶碗」

永井　正浩

はじめに

高麗茶碗は、朝鮮時代の陶磁器（以下、朝鮮陶磁と呼称）を用いた茶碗の総称で、器表に白土を用いて文様を施す粉青沙器、文様のない施釉陶器である灰青沙器、磁器質の胎土で透明釉を掛ける硬質白磁、陶器質の胎土で白濁する釉を掛ける軟質白磁、日本からの注文を受け朝鮮陶磁の技法を用いた注文茶碗などの種類がある。

日本では、一六世紀～一七世紀前半の遺跡から出土する朝鮮陶磁碗のなかに、遺構から茶道具と共に出土することで、茶碗としての用途が特定できたものがある。堺環濠都市遺跡でも蔵と考えられる建物跡から出土した資料で、茶碗と判断できる事例が複数認められる。

堺環濠都市遺跡は、室町時代から現在まで続く都市「堺」の足跡をのこす中世・近世を代表する遺跡で、発掘調査によって遅くとも一四世紀後半には町としての景観が形成されたことを確認している。また、堺を襲った複数回にわたる火災の復興や、建物の建て替えに際して、盛土を施し地盤のかさ上げを行うことが多いことから、各時代の遺構面やそれに伴う陶磁器類が整地層により保護され、良好な状態で残されている。さらに、一五世紀後半から一七世紀初頭の遺構や整地層から出土した陶磁器から、国内外の交易でもたらされた貴重な器を所持する人々の暮らしの一端が明らかとなった。

ところで、遺跡から出土する陶磁器をはじめとした考古資料は、人々が所持した道具が時代を経て出土することにより、歴史の物的証拠として取り扱うことができる。しかし、土中より出土する遺物は、次の点について考慮する必要がある。

遺構や火災層の出土遺物は、共伴する器の組み合わせにより、その用途が推定できる例が認められる。一方でこれらは廃棄や被災等に伴う資料であるため、当時の所持物全てを把握することはできない。例えば、遺構から出土する遺物は、不要もしくは破損したものが対象となり、ほかにも火災層から出土した遺物は、避難の際に貴重品だけは持ち出された可能性がある。

また、遺物の製作年代と、使用後に廃棄された年代には時期差があり、個々の器の使用期間は異なる。遺物の年代については、窯などの生産遺跡の資料や年代の定点となる遺構から出土した遺物の組成と比較することで、個別に検討する必要がある。

本稿では、右記二点を踏まえて、一六世紀から一七世紀初頭の遺跡から出土した高麗茶碗について考察する。

1　遺跡出土資料からみた高麗茶碗のはじまり

堺環濠都市遺跡から出土した陶磁器に、茶道具が少なからず含まれていることから、堺の人々が古くから茶をたしなんでいたことがわかる。本遺跡では、一四世紀後半の整地層から瀬戸天目や中国製茶入（本書四二頁　39―2）などが出土し、一五世紀の遺構や整地層からは中国製天目（本書四二頁　39―1）や瀬戸天目、釜、茶臼などが出土した。

堺環濠都市遺跡で建物跡から茶道具がまとまって出土した例に、一五世紀後半に建てられ、一六世紀前半に火災で焼失した、第９２９地点の礎石建物ＳＢ６１５・ＳＢ６１７がある。倉庫と考えられる礎石建物ＳＢ６１５では、中国製茶壺と中国製青磁花入が、茶道具を収めた建物と考えられるＳＢ６１７

では竹製茶杓、中国製青磁鎬蓮弁文茶碗、風炉、中国製藍釉水注が出土した。このように、出土遺物からみると一六世紀前半ごろまでは、茶道具に中国製や国産の陶磁器を主に用いていた。

高麗茶碗は、一六世紀前半から中頃には日本で用いられていることが、滋賀県西万木（にしゆるぎ）遺跡［挿図1］で出土した刷毛目（はけめ）粉青沙器の碗［挿図2―1］から確認できる。この碗は、居館の堀から天目などの茶道具や銅製の花器と共に出土した。この刷毛目粉青沙器碗は一五世紀後半から一六世紀前半に朝鮮で用いられていたものと同形であり、また同様の碗が博多遺跡群などでも出土していることから、当初は食器として朝鮮から日本へもたらされた碗のなかから、茶碗としてふさわしいものを選び用いたと考えられる。

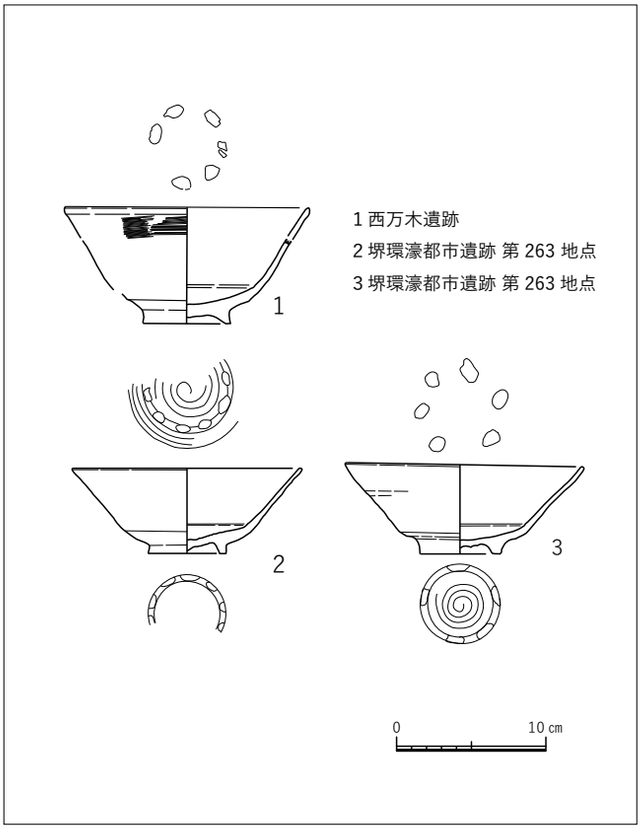
なお、刷毛目粉青沙器碗は、江戸時代になると高麗茶碗の「刷毛目」と呼称するようになる。

この頃、史料では一六世紀の茶の湯において朝鮮陶磁の碗を使用し、「高麗茶碗」として珍重していたことを、茶会記（茶会の内容を記録した書物）などから知ることができる。堺の豪商津田宗達、宗及親子が記した『天王寺屋会記』の他会記では、一五四九年（天文一八）に堺の茶人の椋宗理がひらいた茶会で高麗茶碗を使用した記録が残されている。堺環濠都市遺跡では、この時期に刷毛目粉青沙器の碗などが数点確認できるものの、共伴資料などから高麗茶碗と判断できるものはまだ確認していない。

2　遺跡出土資料からみた高麗茶碗の広がり

一六世紀後半の遺跡では、西日本を中心とした範囲で同じ形状・法量の朝鮮陶磁碗が多く出土することから、高麗茶碗がこの時期から日本へ広まったことがわかる。堺環濠都市遺跡から出土する高麗茶碗で最も多いものは、見込みに円形の段を有する灰青沙器碗である。この形状の碗には、釉を薄く掛け見込みや高台に小ぶりの目跡を七～一二個並べるもの［挿図2―2、本書四三頁　39―7］と、釉をかけ大ぶりの目跡を五～七個並べるもの［挿図2―3］が

挿図１　遺跡位置図



挿図２　遺跡から出土した高麗茶碗の実測図

ある。なお、江戸時代になると前者のような特徴を持つ碗を「斗々屋（ととや）」、後者の碗を「蕎麦（そば）」と呼称する（註1）。片山まび氏は、「斗々屋」の碗の法量や器形が朝鮮時代の一六世紀に用いられた碗と異なることから、日本からの注文茶碗であった可能性を指摘する。

福井県一乗谷朝倉氏遺跡では、一五七三年（天正元）の火災層などから多くの朝鮮陶磁が出土している。なかでも、第51次調査の区画15「医者の家」では、瀬戸美濃茶入や越前水指などの茶道具と共に「斗々屋」が出土している。なお、同遺跡の西山光照寺跡では「蕎麦」が出土しており、「斗々屋」や「蕎麦」が一五七〇年代には日本で流通していたことがわかる。

その後、「斗々屋」などが本州西部や日本海を中心とした遺跡から出土するようになることから、一五七〇年代以降に高麗茶碗の需要が高まると考えられる。堺環濠都市遺跡でも、同時期の遺構や整地層から「刷毛目」や「斗々屋」などが出土する。

また、一五八六年（天正一四）の火災層が認められる大分県中世大友府内町跡では、朝鮮陶磁碗が建物跡や寺の堀跡などから多量に出土しており、一五八〇年代になると高麗茶碗の需要がさらに高まることがわかる。一例をあげると、第12次調査の礎石建物ＳＢ０１では、火災層から中国製天目や備前水指などの茶道具と共に「斗々屋」が出土した。中世大友府内町跡から出土した高麗茶碗には、「斗々屋」や「蕎麦」、「刷毛目」の他に、注文茶碗と考えられる「彫三島（ほりみしま）」や、粉青沙器碗の高台を研磨することで高さを調整し茶碗として用いたものがある。

一五八〇～九〇年代以降になると、関西各地で朝鮮陶磁碗の出土例が増加する。堺環濠都市遺跡でも例外ではなく、第６５５地点では、蔵と考えられる建物の中から、茶陶と共に「蕎麦」一点と「斗々屋」二点が出土した。

この時期は、白磁の皿や鉢、陶器の甕や瓶など碗以外の朝鮮陶磁も出土する。当時の茶の湯において、朝鮮陶磁は茶碗だけでなく、その際に行われる食事や、宴に用いる器にも用いられていていたのであろう。

遺跡の出土時期より古い例となるが、『天王寺屋会記』の他会記には、一五六七年（永録一〇）の記録に、天王寺屋道叱が、豊後から持ち帰ったと考えられる高麗茶碗で茶会を催した記録が残されている。また自会記でも、一五六四年（永禄七）から一五七七年（天正五）の記録に、豊後の客人を招いて堺で催した茶会で高麗茶碗を用いた記録がみられる。このことから朝鮮陶磁の茶陶の入手に、豊後の大友氏もしくは城下の商人が関わった可能性がある。

その後、一五九〇年代末頃から一六二〇年代にかけて、日本では唐津、志野、織部をはじめとした様々な種類の陶器を茶の湯の器に取り入れている。これにより、茶碗の産地や外見に多様化がみられる。

堺環濠都市遺跡で確認した火災層のうち、最も規模が大きいものは、一六一五年（慶長二〇）の大坂夏の陣の前哨戦により堺のほぼ全域が焼失した火災に伴うものである。この焼土層では、茶陶をはじめとする陶磁器や金属製品などが建物に伴う位置を保ったまま良好な状態で出土することが多い。なかには、蔵や町屋などの建物跡の中から朝鮮陶磁碗が茶陶と共に出土したことで、高麗茶碗と推定できる出土例を複数確認している［表1］。

これらの多くは蔵などの遺構から出土したが、第２６３地点ＳＢ３は、会合衆の会所（集会や宴を行う場）であった可能性が指摘される大型の礎石建物に伴う蔵で、大量の中国磁器、国産陶器の茶道具と共に高麗茶碗が出土した。青磁碗、色調の異なる「斗々屋」二点、「蕎麦」、白磁碗とバラエティに富んだ碗が出土しており、季節や客に応じて茶道具の揃えを変えることができるように、複数の高麗茶碗を所有していたと考えられる。

出土地点	出土遺構	出土した高麗茶碗の種類と点数	本書図版番号
第 263 地点（堺区甲斐町東２丁）	SB3	青磁１　斗々屋２　蕎麦１　軟質白磁１	挿図 2-3
第 39 地点（堺区熊野町西２丁）	SB301	斗々屋１　蕎麦１	
第 47 地点（堺区甲斐町西２丁）	SB04	斗々屋１	
第 84 地点（堺区宿院町東１丁）	礎石建物	斗々屋１	39-7
第 787 地点（堺区熊野町東２丁）	SS201	軟質白磁１	
第 232-7 地点（堺区甲斐町西２丁）	塼列建物	彫三島１	39-8
第 929 地点（堺区車之町西１丁）	SB101	硬質白磁１	

表１　堺環濠都市遺跡の 1615 年 (慶長 20) 被災面から出土した主な高麗茶碗の例

堺環濠都市遺跡から出土した「斗々屋」、「蕎麦」、「彫三島」（本書四三頁　39―8）は一乗谷朝倉氏遺跡や中世大友府内町跡から出土した碗と形状等に共通する点が多く、これらは一六世紀後半以降に朝鮮から堺にもたらされたと考えられる。一方、白磁碗は、右記二遺跡から出土する碗と胎土や形状が異なることから、やや新しい様相を示す可能性がある。

3　まとめ

このように、堺環濠都市遺跡から出土する高麗茶碗は、その多くが一六世紀後半にもたらされ堺の人々に広く受け入れられた。この時期は、茶碗だけでなく鉢や皿などの食器、徳利や片口鉢などの酒器、甕などの容器も朝鮮から堺へもたらされていた。これらは堺で使用するために運ばれたものだけでなく、堺を経由して国内で販売する商品も含まれることから、相当な規模の交易が朝鮮と行われていたことが想像できる。

『天王寺屋会記』をみると、津田宗達の記した自会記に一五五四年（天文二三）の茶会で高麗茶碗の使用が記されている。以降の記述で、一五六五年（永禄八）までは「高麗茶碗」（茶会記では主に「かうらい茶碗」と表記）や「上高麗茶碗」であったものが、翌年から「高高麗茶碗」、「平高麗茶碗」、「了雲高麗茶碗」、「少高麗茶碗」など、茶碗の形状や所有者を茶碗の名称に付して記すようになる。また一五八四年（天正一二）以降は、「井戸茶碗」や「太文高麗茶碗」、「高麗うば茶碗」「歪たる高麗茶碗」などの名称が新たに記されている。このことは、一六世紀中頃～後半の時期に堺の豪商が使用するような貴重な高麗茶碗が、堺で使われていたことを示している。

天正年間は、高麗茶碗の普及が急速に進む時期であることが、出土資料から読み取ることができる。ただし、遺跡から出土する朝鮮陶磁の茶碗は、史料に記された「高麗茶碗」と必ずしも一致しない。例えば「井戸」や「粉引」など、当時の茶人の評価が高い高麗茶碗は、堺環濠都市遺跡では、当該時期の遺構や整地層に伴う出土事例はなく、可能性のある破片が確認できたのみである（本書四三頁　39―5・6）。

当時は、高麗茶碗と呼称する朝鮮陶磁碗の評価について、個体ごとに大きな差があったと考えられる。評価の高い碗は、破損しても修復して用いられ、また火災にあった際には避難する優先順位が高いと予想されることから、発掘調査でこれらの存在を確認することは難しい。

このように、遺跡から出土する朝鮮陶磁碗の大半は、名物と呼ばれるような特別なものではない。これらが堺で大量に出土することから、一六世紀後半以降、相当な量の茶碗が朝鮮から堺に運ばれ、多くは商品として、一部は堺の茶会で用いたと考えられる。その背景には豪商が持っていた高麗茶碗と同様の茶碗を、もしくは「高麗物」の道具を所持したい、という思いが人々にあったのかもしれない。

一六世紀後半から一七世紀初頭にかけて、これほど多く出土した高麗茶碗は、その後出土事例が激減する。堺環濠都市遺跡も例外ではなく、大坂や江戸で局所的に出土する事例はあるが、これまでのように市中を流通するような状況は認められない。

一七世紀になると朝鮮との交易は倭館を通じたものに限定される。その後、対馬藩が釜山の倭館で茶碗を生産するようになり、高麗茶碗の生産や流通方法に大きな変化が生じる。このような時代背景も相まって、高麗茶碗の流通に大きくかかわってきた堺は、慶長二〇年の火災を契機にその役割を終えたと考えられる。

（堺市文化財課　学芸員）

（註1）「斗々屋」の多くは「平斗々屋」と呼ぶタイプのものである。なお、出土遺物の中には、腰の形状など伝世の「斗々屋」や「蕎麦」の特徴と合致しないものもある。

〔参考文献〕

・『茶道古典全集』第七巻（天王寺屋会記　他会記）　淡交社　一九五九年
・『茶道古典全集』第八巻（天王寺屋会記　自会記）　淡交社　一九五九年
・片山まび「韓国陶磁史における高麗茶碗」『新たなる江戸の美意識　茶の湯名碗』徳川美術館・五島美術館　二〇〇六年
・永井正浩「堺環濠都市遺跡出土の朝鮮王朝陶磁器碗」『堺市博物館報』二六号　堺市博物館　二〇〇七年

豊臣秀吉と堺

発行日　令和三年五月二十九日
編集・発行　堺市博物館
〒五九〇－〇八〇二
大阪府堺市堺区百舌鳥夕雲町二丁　大仙公園内
電話　〇七二－二四五－六二〇一
デザイン　堀内仁美
印刷・製本　株式会社イチダ写真製版
株式会社サンエムカラー
堺市配架資料番号　1・L4・21・0102